東北地方出土の「橿原式文様浅鉢」について

小林圭一

1　はじめに

「橿原式文様」は、三角形に抉り込んだ文様（三角形刳込文）を交えた七宝文様風の精製有文土器に代表され、西日本の後期末葉～晩期前葉の限られた時期に盛行した文様である。当該土器を多く出土した奈良県橿原市橿原遺跡を標式遺跡としてその名を冠し、基本的には三角形刳込文が関与した文様を指示するが、同文様が関与しなくともそれに類した文様、また文様帯上下端の刻目帯や文様連結部の凹点文を持った七宝文様以外の土器も含まれる。橿原式文様の土器は東海以西を主たる分布域とするが、東日本にも散見され、識別が比較的容易なことから、西日本との交流を示す異系統の土器として、以前より研究者の注視するところとなっていた（大竹 1983、鈴木 1985）。

橿原式文様の土器が俄然脚光を浴びるようになったのは、大塚達朗氏による精緻な型式学的研究（大塚 1995）が発表されて以降であろう。同氏は詳細な文様観察から当該土器の４階梯にわたる変遷（滋賀里段階→橿原段階→宮滝古段階→宮滝新段階）と、東北地方を包摂した広域的な視座から後期末葉～晩期初頭に限定されることを明確にし、当該土器の理解を飛躍的に前進させた。更に今世紀に入って資料集成が進み（深澤 2002、中沢 2002、関根 2006）、列島規模での当該土器の内容が明白にされると共に、標式資料の橿原遺跡出土品が再整理され（松田編 2011）、研究の気運が喚起されている。

東北地方で出土した当該土器について、嘗て筆者も集成を試みた（小林 2010b：第 274 図）。しかし遺漏した資料や新出の資料が存しており、その補足が課題となっていた。そこで本稿ではそれ等の資料を追補して、若干の考察を加えてみたい。ほとんどが東北南部[1)]に位置する遺跡で占められているが、今後も資料の集積が期待され、広域編年の指標として重要性を増すことが想定される。先行研究を大きく踏み出した内容とは言えないが、亀ヶ岡式土器成立期の様相を理解するための基礎的作業を企図している。

なお関東・東北から出土した橿原式文様を施した土器について、これまで「近畿系晩期縄文式土器」（大竹 1983）、「関西系晩期有文土器」（鈴木 1985）、「橿原式文様土器」（中沢 2002）、「滋賀里系土器」（関根 2006）等と称されてきた。橿原式文様は精製の浅鉢形土器に主に施文されているが、深鉢形土器や壺形土器にも認められる（図１）。しかし東北地方の出土例は浅鉢形土器に限られるため、本稿では「橿原式文様浅鉢」の呼称を用いている。また各種の文様名については、関根達人氏の研究（関根 2006）に準拠させていただいた。

2　橿原式文様浅鉢について

橿原式文様は冒頭で触れたように、三角形刳込文が関与した文様を原則とし、それに刻目帯が従属的に加わる。前者は平行線文間に三角形に抉り込んだ文様の先端を相対ないしは交互に対向、背向して配置することで、七宝文様や楕円形の陽刻部を描出するが、陽刻内には沈線文が加えられ、陰影に富む印象的な文様となる（図１）。狭義の解釈では橿原式文様は上記した文様に限定される。しかし東北地方では楕円形の陽刻内に沈線を紡錘状に結束するように配した「結束重弧文」（図２－３・７・14）のみが該当し、その他に弧線を重ねた「山形連弧文」（６・８～ 13）、複数の沈線を鋸歯状に配した「ジグザグ文」（５）、２段のジグザグ文が相対して菱形を連結した「相対ジグザグ文」（１・２）等、三角形刳込文の関与しない文様も存しており、特に当地では山形連弧文が主流となっている。本稿ではこれ等も含め橿原式文様を広義に捉えているが、東北地方の上記した文様には、文様帯の上下端を限る刻目帯が巡らされ、文様の連結部に凹点文が刻まれるのが通例である。橿原式文様の特徴の一つに、鋭いヘラ状工具による刻目が挙げられている（岡田 2012：350 頁）。この刻目帯は一見大洞 BC

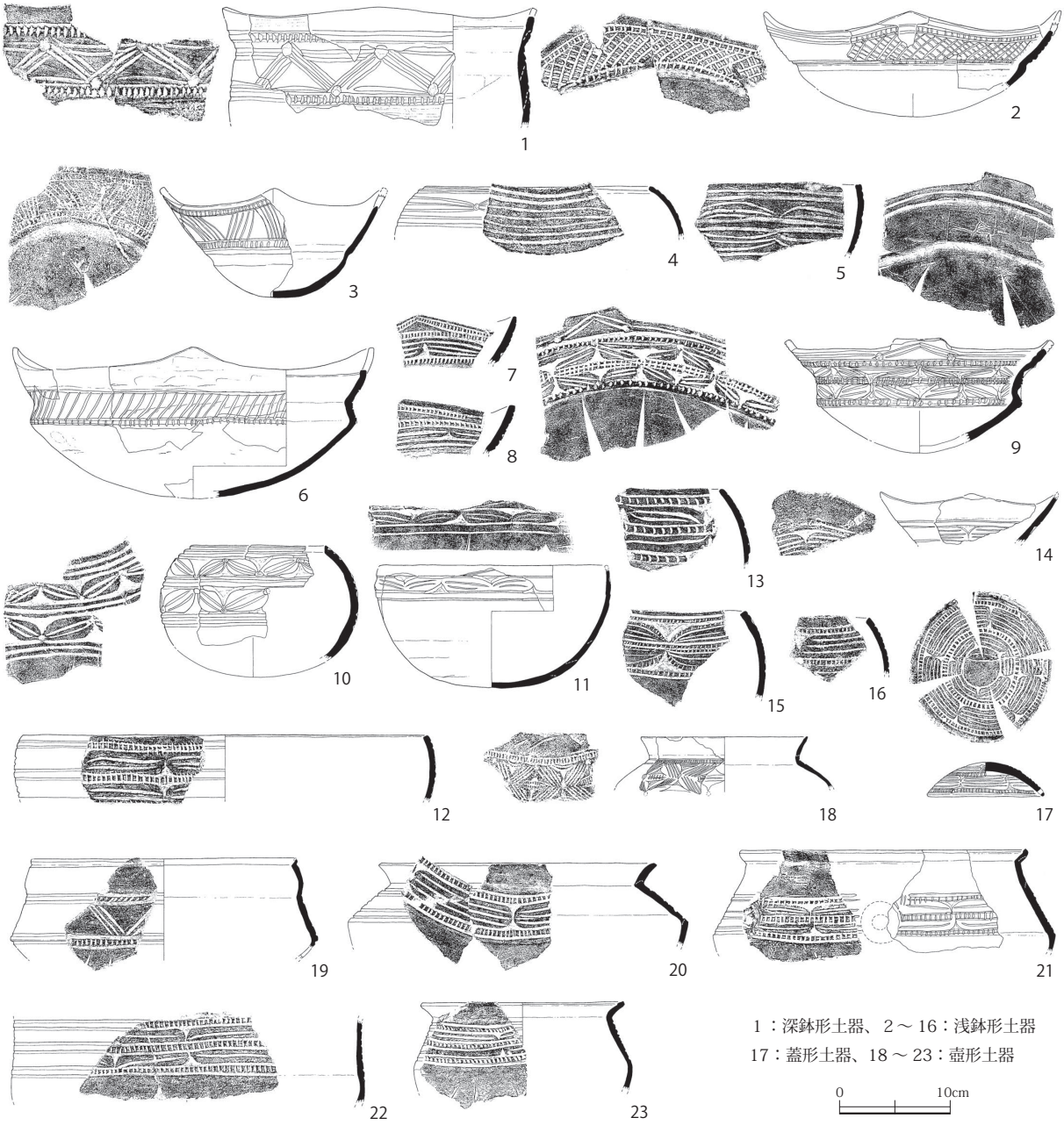


図１　奈良県橿原遺跡出土の橿原式文様の土器

式の珠文に類似する。しかし大洞 BC 式には陽刻部の形状を一定に保つため、陰刻後に「磨き」や「潰し」を加える原則（陽刻部形状の保持原則）が働いており、差異が存している。

上記した橿原式文様は、口径（最大径）に対し器高の低い浅鉢形土器に多く施文され、その他に深鉢形土器、壺形土器等にも認められる（図１）。浅鉢形土器は所謂黒色磨研系浅鉢で、口縁が内彎して立ち上がる椀形の器形の他に、丸底で皿形の胴部で頸胴部界で屈折し口縁が大きく開いたり、胴部上位が張り出し口縁が外折した器形等が存し、また口縁形態も平縁だけではなく緩い波状縁も見られ、本来的に多様である。ところが東北地方では口縁が内彎して立ち上がる平縁の椀形の器形にほぼ限られており、西日本に比べると単調な印象を拭いきれない。

橿原式文様は縄文時代晩期初頭の滋賀里Ⅱ式～同Ⅲａ式を構成する精製土器に施される。当該研究を先導する大塚達朗氏は、橿原式紋様の初現となる「くっつく相対の仕方」を表徴した橿原式紋様・滋賀里段階が後期末葉に成立したと見なしており、後続する橿原式紋様・橿原段階を晩期初頭に位置づけている（大塚 1995：129 － 130 頁）。また関根達人氏は埼玉県川口市石神貝塚出土

の椀形土器（図４－２）を、滋賀里Ⅱ式の器形と刻目帯を残しながら、大洞 B1 式・安行 3a 式に特徴的な磨消縄文を伴う入組文様が施された東西に由来する要素を融合した土器として、「滋賀里Ⅱ式－安行 3a 式－大洞 B1 式」の同時性の証左と評価している（関根 2006：102 頁、同 2008：240 頁）。この折衷土器から大洞 B1 式と橿原式文様の年代的接点が導出されよう[2)]。

しかしその下限については、大塚氏等の積極的な提言は見出せない。近畿では奈良県秋篠（あきしの）・山陵（みささぎ）遺跡（岡田 1998）で重弧文や格子目文、鋸歯状となる多条沈線文の土器が滋賀里Ⅲａ式に伴っており、東海では大洞 BC 式古相に併行する雷（いかづち）Ⅱａ式に伴うことが判明している（増子 2007：21 頁）。これ等の成果を考慮に入れると、橿原式文様の下限は大洞 B2 ～ BC1 式の年代を大きく下ることはなかったと推測される（小林 2010b：483 頁）。

3　東北地方出土の橿原式文様浅鉢

新潟県北半を含む東北地方では、11 遺跡 15 点の出土事例を収集した（図２・３）。東北中部の秋田県の１例を除くと、東北南部の福島県と新潟県で占められている。

（1）福島県の出土例

福島県では８遺跡 12 点の当該土器が抽出された。浜通りに位置した遺跡が６遺跡（図２－１～７・13）と最も多く、中通り（８～ 10）と会津（14）がそれぞれ１遺跡となる。

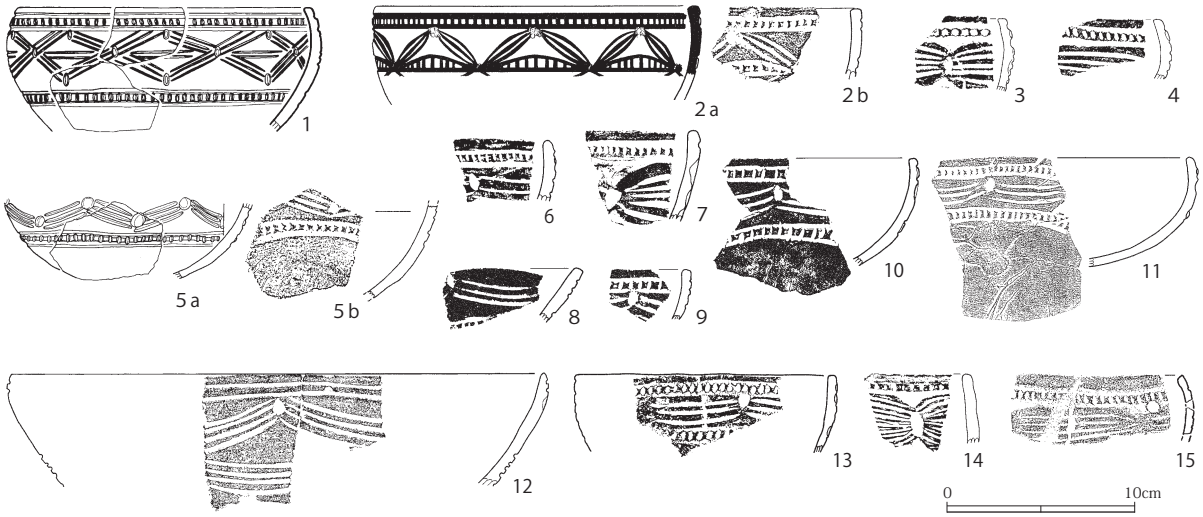
１は番匠地（ばんじょうち）遺跡（いわき市）から出土した。同遺跡は 1985 ～ 93 年の８年間にわたっていわき市教育文化事業団により発掘調査が実施されたが、１は 1987 年度に調査されたＡ低地のうち大洞Ｂ～Ａ式を包含した自然流路（第８号溝跡）から出土した。口縁部は内傾して立ち上がる平縁の椀形で、最大径（推定 16.8 ㎝）は頸部にあり、推定口径は 15.8 ㎝、器厚は５～７㎜を測り、口唇部は平坦気味に作出される。口頸部の上下端に刻目帯を巡らし、それに挟まれた２㎝超の幅に３条一組の沈線によるジグザグ状の文様を交互に２段、また中間にも横位の沈線を配置して、菱形に一文字の文様である「菱一文」を描出し、更に文様連結部には凹点文が刻まれる。なお報告書では先行研究を踏まえて、大洞 BC 式期（高島ほか 1993：第Ⅱ篇 264 頁）または同 C1 式期（同書：第Ⅱ篇第 212 図）に比定されている。

薄磯貝塚（いわき市）では、３点の当該土器が紹介されている。２は同貝塚Ａ地区で表面採集され、「口縁が平縁で、木の葉状の沈刻が施されており、橿原式と見なされる」と報告されている（吉田ほか 1979：52 頁）。口縁部が内彎気味に直上した器形で、推定口径は 17 ㎝、器厚は６㎜を測り、器面は内外ともによく研磨され、黒褐色を呈しており、赤彩の痕跡が見られる。口唇部は平坦で、口縁部には２本の沈線間に縦位の彫刻的なスリットが約５㎜間隔に施されている。更にその約２㎝下位にも同様な刻目帯がみられ、スリット間の空間に３条一組の沈線がジグザク状に配され、連結部に凹点文が刻まれる。下位の刻目帯の下端にも弧状の沈線が認められることから、七宝文様または１のような菱一文を構成していたと推測される。

３・４は 1982 年のいわき市教育委員会による同貝塚Ａ地区の発掘調査で出土したが、両例とも第 29 層（後期末から晩期初頭の土器群を見い出すことができる）からの出土品で、同層準からは瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 C1 式土器が出土している[3)]。両例は口縁部が内傾して立ち上がる平縁の椀形で、器厚は５～６㎜を測り、口唇部は平坦に作出される。口縁に沿って刻目帯が巡らされ、その直下に三角形の陰刻文様により横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内は５条の沈線が陰刻され、連結部には凹点文が刻まれる。写真図版から両例は黒褐色を帯びた色調で、同一個体のようにも窺われるが、拓影図では３の刻目帯の陰刻が太く刻まれている。なお報告書（大竹ほか 1988）では、大洞 BC 式に比定される土器群（第Ⅸ群土器）に分類され、滋賀里Ⅱ式に比定されている。

５は根古屋遺跡（いわき市）で出土した。同遺跡は 1983 年にいわき市教育文化財団によって発掘調査されたが、出土状況や共伴関係は不明である。内彎気味に立ち上がる椀形の器形であるが、口縁部を欠損しており、器厚は５～６㎜で、内外面共に赤彩の痕跡がみられる。文様帯下端に刻目帯を巡らし、凹点文を基点に３条の沈線がジグザグ状に配置される。

６は日向南遺跡（飯舘村）の第３次調査で出土した。同遺跡の第３次調査は 1986 年に福島県文化センターによって実施されたが、６は調査区西部のＬⅡ’ａ層（黄



１：番匠地遺跡（福島）、２～４：薄磯貝塚（福島）、５：根古屋遺跡（福島）、６：日向南遺跡（福島）、７：羽白Ｃ遺跡（福島）、８～ 10：浜井場Ｂ遺跡（福島）、11：元屋敷遺跡（新潟）、12：矢津遺跡（新潟）、13：本町西Ａ遺跡（福島）、14：村下遺跡（福島）、15：堀ノ内遺跡（秋田）

図２　東北地方出土の橿原式文様浅鉢集成図

茶色砂質土）から出土した。同層準は縄文前期～晩期の遺物を包含し、特に後期末葉以降の遺物が多く出土した。６は口縁部が内彎気味に直上した器形で、器厚は６㎜を測り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられている。口縁に沿って刻目帯が巡らされ、その直下に凹点文を基点に３条の弧線文が配されると想定される。なお報告書（鈴鹿ほか 1987）では後期中葉（Ⅲ群土器２類）に分類されている。

７は羽白（はじろ）Ｃ遺跡（飯舘村）の第１次調査で出土した。同遺跡の第１次調査は 1987 年に福島県文化センターによって実施されたが、７は東地区のＬⅡｂ層（黒味を帯びた暗褐色土）から出土し、同層準には縄文中期～晩期前半にかけての土器が含まれていた。７は口縁部が内彎気味に直上した器形で、器厚は６㎜を測り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられている。口縁に沿って刻目帯が巡らされ、その直下に浅い三角形の陰刻文様により横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内は５条の沈線が陰刻され、連結部には凹点文が刻まれる。なお報告書（鈴鹿ほか 1988）では大洞 BC 式（Ⅴ群土器２類）に分類されている。

13 は本町西（もとまちにし）Ａ遺跡（富岡町）で出土した。同遺跡は 2000 年に福島県文化センターによって発掘調査され、調査区北東部の黒褐色土（ＬⅡｂ層）から出土したが、出土状況や共伴関係は不明である。13 は口縁部が内彎気味に直上した器形で、推定口径が 14 ㎝弱で、器厚は５～６㎜を測る。口唇部が平坦に作出され、上下端を刻目帯に挟まれた２㎝幅の文様帯内は３条の弧線文で構成され、連結部に凹点文が刻まれる。報告書では「胎土や焼成より近畿地方からの搬入品ではなく、本遺跡周辺または当地域と近畿地方との間の地域で模倣された土器である可能性が高い」と考えられている（能登谷ほか 2002：160 頁）。

８～ 10 は浜井場Ｂ遺跡（須賀川市）で出土したが、中通りでは唯一の遺跡となる。同遺跡は 1987 年に福島県文化センターによって発掘調査が実施され、３点とも遺物包含層から出土したが、出土状況の詳細は不明である。９・10 は浅い窪地である D1 グリッドから出土し、９は地山（第Ⅶ層）直上の茶褐色土層（第Ⅵ層）、10 は上位の耕作土（第Ⅱ層）の出土と注記されている。同一の個体と推測され、口縁部が内彎して直上した椀形の器形で、器厚は５㎜を測り、口唇部はやや平坦気味に作出される。上下端を刻目帯に挟まれた幅２㎝超の文様帯内は３条の弧線文で構成され、連結部に凹点文が刻まれる。８は F2 グリッドの耕作土（第Ⅱ層）の出土と注記されている。口頸部が直線的に外傾して立ち上がる浅鉢形土器で、器厚は５～６㎜を測り、口唇部は平坦に作出される。口縁上端の区画帯はなく３条の弧線文が口端に露出しており、下端に刻目帯が巡らされ、文様帯幅は 2.5 ㎝となる。３例とも写真図版から黒褐色を帯びた色調であると推定される。同遺跡からは瘤付土器第Ⅲ段階～大

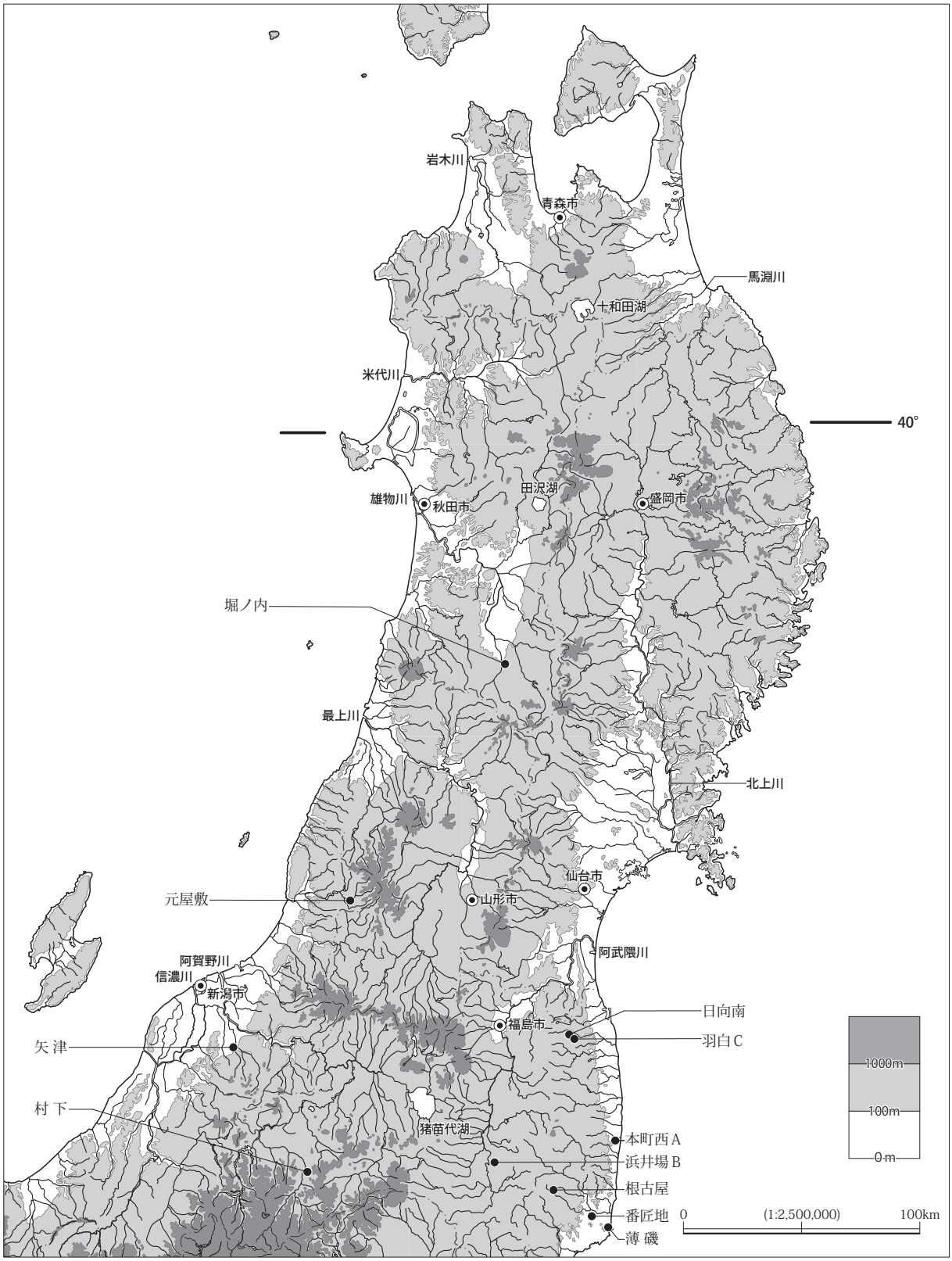


図3　東北地方の橿原式文様浅鉢出土遺跡

洞C2式までの土器が出土しており、安行2式土器も認められる。なお報告書では滋賀里Ⅲ式として大洞BC～C1式期に位置づけられている(阿部ほか1988:80頁)。

14は村下遺跡A地点（南郷村）で出土したが、会津では唯一の資料となる。同遺跡は1989・90年に発掘調査が実施され、14はC11区から出土したことから、第2次調査の資料であると想定されるが、出土状況や共伴関係は不明である。口縁部がやや内傾気味に立ち上が

り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられている。口縁に沿って刻目帯が囲繞され、その直下に浅い三角形の陰刻文様により横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内は 10 条程度の沈線が陰刻され、連結部には凹点文が刻まれる。報告書では晩期後葉の浮線網状文土器と共に図示されていることから、晩期後葉の資料として扱われたと推測される[4)]。なお同遺跡では安行 3a 式土器も出土しており、晩期初頭における関東との交流関係が想定されている。

（２）新潟県の出土例

新潟県では２遺跡２点の当該土器が認められるが、いずれも北部の下越地方から出土している。

11 は元屋敷遺跡（旧朝日村）で出土した。同遺跡は 1991 ～ 93 年と 1996 ～ 98 年に朝日村教育委員会により発掘調査が実施され、後期前葉～晩期末葉の膨大な量の遺物が出土したが、11 は居住域のある上段の旧流路西側の包含層（23J15 区Ⅳ層）から出土した。但し出土状況や共伴関係は不明である。口縁部が内彎して直上した椀形の器形で、器厚は５～６㎜を測り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられる。上下端を刻目帯に挟まれた幅２㎝弱の文様帯内は３条の弧線文で構成され、連結部に凹点文が刻まれる。報告書（滝沢ほか 2002：写真図版・観察表編 90 頁）によると、外面に炭化物の部分的な付着や器面のナデ調整が認められ、色調は茶褐色を呈する。また胎土はⅠ類（雲母・石英を多量に含み、微量から少量の粘土粒を含む傾向にある）に分類されており、時期は大洞 B2 式併行期（12 期）～大洞 BC 式併行期（13 期）に位置づけられている。

12 は新潟県立歴史博物館が所蔵する落合清志コレクションの資料で、矢津遺跡（旧村松町）からの採集品である（荒川 2009 ）。12 は口頸部が内彎気味に外傾して立ち上がる平縁の浅鉢形土器で、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられるが、尖鋭気味に作出される。推定口径は 27.9 ㎝、器厚は６㎜を測り、外面はよく研磨され赤彩が見られ、内面にはナデ調整が加えられる。口縁に沿って平行沈線文が囲繞されるが、沈線間は刻まれない。その直下に凹点文を基点として４条単位の弧線文が施され、更にその下位にも緩い弧線文が認められることから、基点をずらした弧線文を重層させたと想定される[5)]。

なお新潟県では、村尻遺跡（新発田市）で出土した刻目帯を有し鋸歯状山形沈線文を配した鉢形土器が、関西系晩期有文土器と指摘されている（鈴木 1985）。しかし大洞 C2 式に帰属されるので、本稿の対象から除外した。

（３）秋田県の出土例

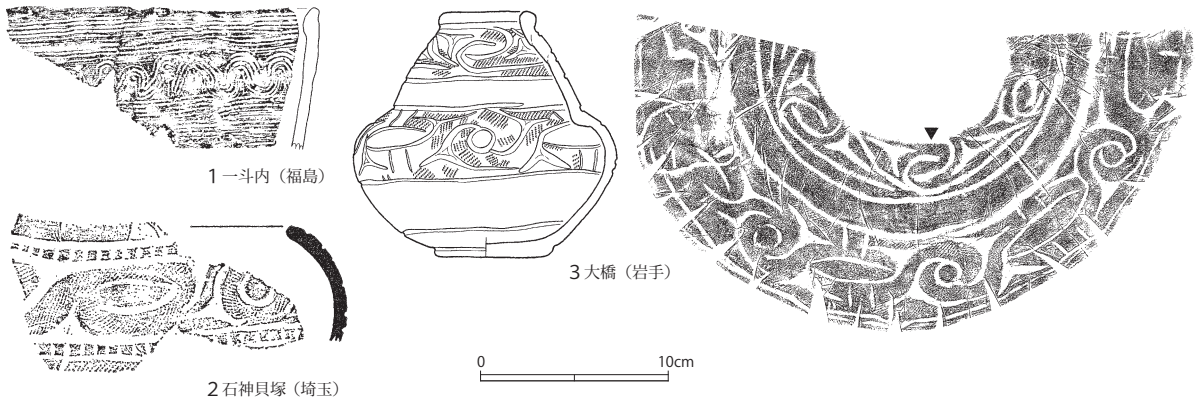
秋田県では、東北中部である横手盆地に位置する堀ノ内遺跡（湯沢市）で、当該土器が１点出土している（加藤ほか 2008）。同遺跡は 2003・04 年に秋田県埋蔵文化財センターにより発掘調査され、15 は調査区北東の後期中葉～晩期初頭の遺物包含層（Ⅵb(2) 層）から出土した。口縁部は内傾して立ち上がる平縁の椀形で、器厚は４～５㎜を測り、口唇部は平坦気味に作出される。口縁に沿って刻目帯を巡らし、その直下に横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内には４条の沈線が確認されるが、楕円文の連結部に凹点文は認められない。楕円文周縁の三角形の陰刻は判然とせず、刻目帯直下に補修孔が穿たれており、器面には文様施文後にナデ調整が加えられている。堀ノ内遺跡では瘤付土器第Ⅱ段階～大洞 BC2 式期の遺物が多く出土し、「入組三叉文高坏」等の仙北湖沼地帯に固有の土器群が出土しており、求心力を持った拠点集落であったと評価されている（小林 2010a）。

なお秋田県では同じ横手盆地に位置する平鹿（ひらか）遺跡（旧増田町）から、橿原式文様とされる土器３点が出土したと指摘されている（大竹 1983）。しかしいずれも晩期後半（大洞 C2 ～Ａ式）に帰属されるので、本稿の対象から除外した。

４　考　察

（１）器形の特徴

東北地方で出土した橿原式文様浅鉢のほとんどは、口縁部が内彎した椀形の器形で、口端にかけて直上または内傾して立ち上がる。破片資料だけなので、全体の形状は推測の域を出ないが、口径は 14 ～ 29 ㎝の範囲（多くは 20 ㎝以下）にあり、底部は平底または緩い丸底をなすと想定され、器厚は５～６㎜が大半を占める。口縁は平縁が多く、口唇部は緩い丸味を持って仕上げられたり、平坦に作出される。器面は内外面ともよく研磨されており、黒褐色～茶褐色を呈し、赤彩される傾向にある。



1：櫛描文土器、2：大洞B式と橿原式文様浅鉢の折衷土器、3：大洞B1式壺形土器

図4　縄文時代後期後葉〜晩期初頭の関連資料

上記したように器形には規格化が認められる。その意味で、口径が大きく口唇部が尖鋭気味に仕上げられた矢津例（図2－12）は、やや異質の感も否めない。また直線的に外傾した器形で、口端の区画帯がなく口頸部文様が露出した浜井場B例（8）は、器形の規約から逸脱しているように窺われる。

（2）文様の特徴

東北地方出土の当該土器の文様に関しては、3本一組の沈線文様、文様帯上下端の刻目帯、文様連結部の凹点文が、共通項として指摘される。

文様モチーフは、山形連弧文（図2－6・8〜11・12?・13）が多数を占め、結束重弧文（3・4?・7・14・15）が続く。その他は相対ジグザグ文（1・2）やジグザグ文（5）で、バラエティーに乏しい印象を受ける。三角形刳込文が関与するのは結束重弧文のみで、しかも浅い陰刻で本場のような深く抉られたものではない。楕円形の陽刻内には4〜5条の沈線文が加えられるが、14は10条程度の沈線文が認められる点で異質である。またこの結束重弧文以外は、3条の沈線を単位（12のみ4本単位）とした文様で構成される点が、東北地方の大きな特徴となっている。

文様帯幅は文様が1段で構成される場合、2㎝前後が通例であるが、2段で構成される場合は幅広となる。口縁部に沿った刻目帯は、通常口端から3〜5㎜下位に巡らされ、そのため口端に細い無文帯が作出される。刻目帯は幅6〜8㎜の平行沈線の間に、約5㎜間隔で刻目が加えられるが、ヘラ状工具によるものなのか刻目は一般に細く、大洞BC式のような陰刻後の「磨き」や「潰し」の手法は認められない。なお橿原式文様のヘラ状工具による刻目を、東北地方の瘤付土器に関連付ける意見（岡田2012：350頁）もあるが、筆者には判断しかねる。

文様連結部の凹点文は、縦長に抉り込まれた刺突である。沈線文様を施文した後に刻まれ、文様のアクセントとなっている。資料集成（深澤2002）を見ると、本場の橿原式文様では必須の要素にはなっていないので、関東・東北に強く働いた規範であったと考えられる。

（3）編年的位置について

編年的位置を考える上で、出土状況や共伴関係が明確に捉えられた事例は認められない。ほとんどの遺跡では後期末葉（瘤付土器第Ⅲ段階）〜晩期前葉（大洞BC式）の土器が出土しており、この年代幅に充当されることは確実であろう。薄磯貝塚では後期末から晩期初頭の土器群が主体となる第29層から出土し、年代的根拠と見なす向きもあるが、同層準には瘤付土器第Ⅲ段階〜大洞C1式土器が認められており、厳密な根拠にはなり得ない。

これまでの近畿・東海地方の研究成果や折衷土器（図4－2）の在り方からは、大洞B1式を中心に瘤付土器第Ⅳ段階〜大洞B2式期の時間幅に帰属される可能性が高いと考えられる。その下限が大洞BC式期まで下るのか判然としないが、当該土器に見られる刻目帯の陰刻の処理には前記した差異が存しており、刻目帯が大洞BC式と接点を持つとは見なせない。多くの遺跡で安行2・3a式土器が出土していることも示唆的と言えよう。

東北地方では山形連弧文で構成された例が多数を占める。しかし西日本で主流を占めた文様ではない（図1）。

その他に結節重弧文やジグザグ文、相対ジグザグ文が存するが、いずれも同期の所産となるのであろうか。岡田憲一氏の直近の研究（岡田 2011）では、山形連弧文（岡田氏の多重弧線文）は滋賀里 2b 期に位置づけられており、橿原式文様の土器の中でも新相となる。ジグザグ文（岡田氏の山形文）がこれに先行する滋賀里 2a 期（新）となり、楕円文の連結した結節重弧文（岡田氏の帯内珠文に収斂する集合弧線文）は滋賀里 2b 期ないし同 3a 期にかけての時期に位置づけられている。滋賀里 2a ～ 2b 期は大洞 B1 ～ B2 式の時期に相当するが、東北的視座から新旧関係を論じることは出来ない。但し移入された時期が極めて限定されることは確かであろう。

（４）分布について

橿原文様浅鉢は本町西Ａ遺跡と根古屋遺跡を除くと、比較的規模の大きな遺跡から出土している。これ等の遺跡はそれぞれの地域において求心力を持った有力遺跡と見られており、選択的にもたらされたと考えられる。いずれも小破片の資料からなり、出土点数はほとんどが１点のみで、複数出土した遺跡は薄磯貝塚と浜井場Ｂ遺跡に限られる。これまでの事例から、特定の遺跡に大量にもたらされたのではなく、少量の土器が移入され珍重されたと推測される。

出土した遺跡の分布を見ると、東北最南端の福島県の浜通りに集中している（図３）。浜通りは双葉地域（双葉郡内の６町２村）を中部として、それより北が北部、いわき市域が南部に区分されるが、南部が３遺跡５点と多く、中部が１遺跡１点、北部が２遺跡２点となる。数量から判じて、太平洋沿岸が主要な搬入ルートになっていたと考えられる。しかし福島県内では少数であるが中通りや会津にも認められており、それぞれに独自のルートが存していた可能性も想定される。

また新潟県の日本海沿岸でも飛び地的に出土しているが、日本海に沿った搬入ルートが存したのか、福島県を通じてもたらされたのかは、現時点では判断できない。秋田県の堀ノ内遺跡は山形県を飛び越え孤立して存している。交易品として中継されて運ばれたのではなく、関東方面から直接将来されたのであろうか。

なお当該期に東北地方で出土した同様の異系統土器として、東海地方の櫛描（くしがき）文土器が福島県中通りの一斗内（いっとうち）遺跡（須賀川市）で出土した事例（図４－１）を、増子康眞氏が指摘している（増子 2004：22 頁）。１は幅約１㎝の櫛歯状工具（５本一組？）で、口縁部から横位・波状・横位の順で整然と施文されており、同氏は晩期初頭伊川津Ⅱ式に裁定している。東北南部の後期後葉には、櫛歯状条線文を施した粗製深鉢形土器が盛行するが、多くは口縁部のみが横位方向で、その直下が縦位方向施文となっており、全面横位方向施文の例も存している。しかし１のような横位波状文の例は見出せない。増子氏は通常の精製土器の移動と異なり、土器の製作者自身の移動を強く示唆する事例と理解している。群馬県内では複合口縁に刺突文を施文した本刈谷式類似の深鉢も認められており、同氏の指摘を是とした場合、後期後葉～晩期前葉の東海地方と東北南部・北関東との間には、相互の交流関係の存していた可能性が考えられる。

５　まとめ

東北地方出土の橿原式文様浅鉢を集成し、その特性を検討してきた。年代的には後期末葉～晩期初頭、土器型式では瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B2 式期に相当し、特に大洞 B1 ～ B2 式期に主体があったと考えられる。東北から出土した当該土器は規格性が強く、椀形の器形や連弧状の文様が多く認められるが、これ等の特徴は関東地方の出土例と共通する。近畿・東海では椀形以外の浅鉢形土器が多く、文様も多様である（図１）。東北では橿原式文様の土器が選択的に受容された様相が窺われるが、西日本から東北へ直接将来されたのではなく、関東で模倣・製作された橿原式文様の土器が搬入された公算が高く、当該土器に関する限り西日本とは関東方面を媒介した間接的な関係にあったと推定される。当該土器を出土した遺跡で安行式系土器が認められる点も傍証となろう。

当該土器を出土した遺跡は地理的に近接した東北南部に偏在するが、求心力を持った拠点集落で出土しており、僅かであるが日本海側の新潟県や秋田県にも認められる。これ等の土器の胎土は在地系土器とは異なっており、上記したように関東方面で製作された土器が持ち込まれたと想定されるが、日本海側で飛び地的に出土しているのは、人伝に中継されたのではなく、直接土器が運び込まれたと理解すべきであろう。

一方後期末葉～晩期中葉の近畿地方では、東北系土器

の出土が目に付く。これ等の土器は東北から直接もたらされた搬入品ではなく、在地もしくは周辺地域で製作された模倣品が主体となっている。模倣品には亀ヶ岡式の規約から逸脱した例も認められるが、亀ヶ岡式土器の製作技法を熟知した者が担っていたと考えられ、亀ヶ岡式の荷担者が該域の拠点集落（滋賀里・橿原遺跡等）の構成員として受け入れられ、土器製作に関与していた可能性が高いと推測されている（小林 2012）。

東西で見られる異系統土器の背後にある地域間交流の在り方に、差異が存していたと想定したが、特に後期末葉～晩期前半にかけて東北系土器が他地域で多く出土するのに対し、東北では他地域からもたらされたと考えられる土器が思いの外少ないのが実情である。亀ヶ岡式土器の相対的優位性から、一方的な需要が生じていたことも否めないが、対等な関係を基底とした地域間交流が予察される以上、土器に見られる異系統的要素の抽出が、亀ヶ岡式成立期の土器研究において重要な課題となっている。

註

1) 東北地方の地域区分については、拙書（小林 2010b：10－12 頁）に準拠する。即ち「東北中部」は、北緯 40° 以南（厳密には北緯 39° 45′ 付近の秋田市－田沢湖－盛岡市－宮古市を結んだライン）から山形・宮城県にかけた地域に相当し、北緯 40° 以北が「東北北部」、山形・宮城県と新潟・福島県の境界を結んだラインより以南が「東北南部」に相当する。なお山形県の最上川上流域（置賜地方）と宮城県の阿武隈川下流域は、緩衝地帯として東北南部に含まれる可能性が高い。

2) 図 4－2 は 1966 年に発掘調査された A 地点貝塚から出土した資料である。「安行系の土器」の浅鉢 H（口縁が内傾する浅鉢）に分類され、口縁が小波状をなすと見られ、刻目帯の間にレンズ状の各接点には三叉状文を上下から互い違いに対向させている。内外面ともよく研磨されており、安行 3a 式に伴うものと報告されている（小田ほか 1975：29 頁）。同例の文様と類似したものとして、岩手県北上市大橋遺跡出土の大洞 B1 式壺形土器（図 4－3）を図示したが、楕円形と円文の交互の磨消区画に、入り組む三叉状の陰刻文様が関与する。楕円形と円文の交互に配した構成は横位連繋の入組文の系譜が想定され、円形区画は入組文の咬合部、楕円形区画は帯状文に相当する。

3) 大竹憲治氏により図 2－3 は「大洞 BC 式で古い段階の貝層」、4 は「最下層に近い大洞 B 式に比定される貝層中」より出土したと紹介されている（大竹 1983：23 頁）。しかし報告書（大竹ほか 1988）では、同じ第 29 層からの出土品として図示されており、両例の細かな出土層位を跡付けることは出来ない。

4) 筆者は図 2－14 の存在を関根達人氏の研究（関根 2006）によって知った。報告書（司東ほか 1991）では浮線網状文土器として図示されているが、連結部の上下幅が広い点や、沈線の間隔が一定でなく、沈線に挟まれた陽刻部も比較的平坦に作出されることから、浮線網状文土器の範疇には含まれないと判断される。但し陽刻内の沈線が 10 条程度と多いのが気掛かりである。なお写真図版から、黒褐色を帯びた色調であることが窺える。

5) 増子康眞氏は刻目帯を持たない連弧文土器を、橿原式とは無関係であると判じている（増子 2007：24 頁）。同氏の言説に従うならば、矢津例（図 2－12）は橿原式文様の範疇に含まれないことになるが、刻目帯を持たない山形連弧文の土器は関東方面に少なからず存しており（中沢 2002：第 10 図）、矢津例は該域から運び込まれたと推測される。

引用文献

阿部俊夫ほか 1988『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告 25 浜井場 B 遺跡・舌内塚・舌内板碑群・古宿遺跡』福島県文化財調査報告書第 189 集 福島県文化センター・福島県教育委員会

荒川隆史 2009「新潟県矢津遺跡出土土器の再検討」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 10 号（特集 落合清志コレクション 矢津遺跡出土土器の研究） pp.7-121 新潟県立歴史博物館

大竹憲治 1983「関東・東北地方出土の近畿系晩期縄文式土器について」『考古学ジャーナル』第 224 号 pp.23-25 ニュー・サイエンス社

大竹憲治ほか 1988『薄磯貝塚－縄文時代晩期貝塚の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告第 19 冊 いわき市教育文化事業団・いわき市教育委員会

大塚達朗 1995「橿原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 13 号 pp.79-141 東京大学文学部考古学研究室

岡田憲一 1998「1 期 縄文時代（滋賀里Ⅲ a 式段階）」『秋篠・山陵遺跡－奈良大学附属高等学校建設に伴う発掘調査報告書－本文編』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第 17 集 pp.104-114 秋篠山陵遺跡調査会

岡田憲一 2012「3 節 橿原遺跡の縄文時代晩期初頭土器と「橿原式」」『重要文化財 橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第 11 冊 pp.336-351 奈良県立橿原考古学研究所

小田静夫・金子裕之・金子浩昌 1975「埼玉県石神貝塚の調査」『埼玉考古』第 13・14 号 pp.1-86 埼玉考古学会

加藤朋夏・高橋学 2008『堀ノ内遺跡－一般国道 13 号湯沢横手道路建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』秋田県文化財調査報告書第 432 集 秋田県教育委員会

小林圭一 2010a「「入組三叉文高坏」再考」『宮城考古学』第 12 号 pp.153-166 宮城県考古学会

小林圭一 2010b『亀ヶ岡式土器成立期の研究－東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式－』 早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所

小林圭一 2012「亀ヶ岡式土器の分布と遠距離交易」『三大学公開シンポジウム－パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会－発表要旨集』 pp.43-55 早稲田大学考古学研究室

周東一也・宮沢聡 1991『村下遺跡 A 地点の調査』南郷村文化財調査報告 南郷村教育委員会

鈴鹿良一ほか 1987『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅸ 日向南遺跡（第 3 次）・稲荷塚 B 遺跡』福島県文化財調査報告書第 182 集 福島県文化センター・福島県教育委員会

鈴鹿良一ほか 1988『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ 羽白 C 遺跡』福島県文化財調査報告書第 194 集 福島県文化センター・福島県教育委員会

鈴木加津子 1985「関東北の関西系晩期有文土器小考」『古代』第 80 号（西村正衛先生古稀記念 石器時代論集） pp.258-276 早稲田大学考古学会

関根達人 2006「東北地方出土の安行系・滋賀里系土器からみた地域間交流」『ムラと地域の考古学』（林謙作編） pp.97-132 同成社

関根達人　2008 「広域編年の事例②　亀ヶ岡式土器」『縄文時代の考古学２　歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－』 pp.240-256　同成社
高島好一・木幡成雄ほか　1993 『久世原館・番匠地遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 33 冊　いわき市教育文化事業団・いわき市教育委員会
高島好一ほか　2007 『根古屋遺跡・上野遺跡－縄文後期埋設土器と石囲炉・円墳の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告 118 冊　いわき市教育文化事業団・いわき市教育委員会
滝沢規朗・高橋保雄ほか　2002 『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）－奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ－』朝日村文化財報告書第 22 集　朝日村教育委員会
中沢道彦　2002 「中部地方出土の橿原式文様土器」『日本考古学協会 2002 年度橿原大会　研究発表資料集』 pp.35-47　日本考古学協会 2002 年度橿原大会実行委員会編
能登谷宣康・三浦武司ほか　2002 『常磐自動車道遺跡調査報告 32　上郡Ｂ遺跡・本町西Ａ遺跡』福島県文化財調査報告書第 391 集　福島県教育委員会・福島県文化振興事業団
深澤芳樹　2002 「橿原式紋様の展開」『日本考古学協会 2002 年度橿原大会　研究発表資料集』 pp.25-33　日本考古学協会 2002 年度橿原大会実行委員会編
増子康眞　2004 「東三河縄文晩期前半土器群の編年再編」『古代人』第 64 号　pp.10-38 名古屋考古学会
増子康眞　2007 「愛知県西部の縄文晩期〈寺津式・雷Ⅱａ式〉土器組成の検証」『古代人』第 67 号　pp.1-25　名古屋考古学会
松田真一編　2011 『重要文化財　橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第 11 冊　奈良県立橿原考古学研究所
八木勝枝・新井田えり子・吉田真由美　2006 『大橋遺跡発掘調査報告書－中山間総合整備事業岩間地区関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 481 集　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
山内幹夫ほか　1984 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査　16　一斗内遺跡』福島県文化財調査報告書第 132 集　福島県文化センター・福島県教育委員会
吉田秀亨ほか　1979 「薄磯貝塚報告」『考古』第 20 号　pp.1-97　福島県立磐城高等学校史学部

図版出典

図１－１～23：（松田編 2011：図８・11 ～ 14・16・17）
図２－１：（高島ほか 1993：第 98 図１）、2a：（吉田ほか 1979：第７図８）、2b：（大竹 1983：図２－４）、３：（大竹ほか 1988：第 46 図１）、４：（大竹 1988：第 46 図２）、5a：（高島ほか 2007：第 13 図７）、5b：（大竹 1983：図２－５）、６：（鈴鹿ほか 1987：図 97 －２）、７：（鈴鹿ほか 1988：図 263 － 21）、８：（阿部ほか 1988：第 41 図包 366）、９：（阿部ほか 1988：第 41 図包 365）、10：（阿部ほか 1988：第 41 図包 367）、11：（滝沢ほか 2002：図面図版 284 － 3675）、12：（荒川 2009：第 47 図 680）、13：（能登谷ほか 2002：図 50 －３）、14：（周東ほか 1991：図 44 － 13）、15：（加藤ほか 2008：第 234 図 15）
図３：国土地理院発行（1996 年３月）「１：500,000 地方図（３）東北」をベースに作成
図４－１：（山内ほか 1984：第 60 図 112）、２：（小田ほか 1975：第 16 図 144）、３：（八木ほか 2006：第 137 図 1253）